

勤務医部会だより

医療現場におけるセキュリティ対策



幹事 奥村明彦
(海南病院 院長)

乳腺外科医が、術後の回診時に患者の胸を舐めるなどの行為をしたと訴えられている。常識的にもあり得ないことではあるが、麻酔の影響によるせん妄状態の患者が訴えたことで、これほど大きな騒動になっていることに違和感を覚える。映像記録が残ってさえいれば、このような不毛な争いが長期化することもなかったのではないかと思う。最近、病院やクリニック内での傷害事件や、トラブルの話をよく耳にする。診察中に医師が患者に切りつけられて大けがを負わされたり、最悪は命を落としたりという事件も報道されている。事件には至らなくても、深夜の救急外来で泥酔患者が大暴れる、診察室で医師の態度が悪いとって患者や家族が暴言や暴力を振るう、クレマーとの不毛な言い争いに貴重な時間を取られる、などの経験は、医師ならだれもが一度は経験しているのではないだろうか。また最近、女性患者の診察時には必ず女性看護師やスタッフを同席させるなど、トラブルを避けるために異常なほどに気を使わなくてはならないことも増えている。トラブルや争いごとは、何より巻き込まれた医師やスタッフのモチベーションを低下させる。場合によっては、精神的なトラウマを負うこともある。考えてみれば、日本の病院ほど無防備な施設はない。24時間フルオープンで、いつでもだれでも中に入ることができ、だれにも怪しまれることなく、病室にもすぐに行ける。病院やクリニックは、さまざまな背景や目的を持った人が、多数出入りするところである。アメリカの病院などは、エントランスでレスラーのような体格の良いガードマンが常に数人いて、入場者をチェックしているし、夜間などは必ずIDの提示を求められる。日本の病院でも、病院内の職員や患者をトラブルから守るために、もう少しセキュリティを強化するべきではないだろうか。

最近、街中いたるところに防犯カメラが設置さ

れている。常に監視されているようでプライバシーの侵害であるという意見もあったが、犯罪の抑止効果が認められ、また、事件や事故などが発生した場合にも、カメラの映像を解析することで、解決に結びつくことも多いという現状から、現在ではほぼコンセンサスが得られているようである。また、身近な例では、煽り運転のトラブルを回避するためにドライブレコーダーを取り付ける人が増えている。最近、患者と患者の家族から、診察の様子をスマホで撮影しても良いかと聞かれたことがあった。画像には多くの人が映り込むし、その画像をSNSにアップされたりすれば、大きなトラブルに発展する可能性もある。さすがに撮影は遠慮していただいたが、このケースのように正直に話してくれる人はまだ良い方で、黙って隠し撮りをされていたり、音声などは黙って録音されていたりすることもしばしばあり、それを止めさせることは、現実問題としては相当難しい。スマホなどハイテク機器の登場で、画像を記録することがいとも簡単にできるようになった今では、写真や動画を撮影することが日常生活の一部になっているといっても過言ではない。

このような時代の流れの中にあって、医療の現場はあまりにも無防備ではないかと思う。すでに施設内の各所に防犯カメラを設置しているクリニックや病院はあるかもしれないが、診察室内の録画については、プライバシーの問題、録画データの取り扱いなど、整理するべき問題が多く、相当ハードルは高い。どの程度のトラブル抑止効果があるのかも疑問であり、画像記録を残すのみでは、犯罪行為やトラブルを未然に防ぐことはできない。しかし、病院が映像や音声の記録を残すことにより、避けることができるトラブルもあると思われる。何より、現場の医療者は、ある程度の安心感が得られるのではないだろうか。患者の権利のみが強調され、理不尽なトラブルや訴訟が増えるばかりでは、安心して診療に没頭できない。医療者が安心して診療に従事できる環境を整備することが必要であると思う。